

ハイブリッドな日本と グローバル時代における宗教

ダンカン・ウィリアムズ〔訳〕堀江宗正^{ほりえのりちか}

1 ハイブリッドな日本

—アジアと西洋に挟まれて

二世紀初頭、日本は独特のポジションに立っている。アメリカで「ジャパン・バッシング」が起こっていた時代はとうの昔だ。あの頃の日本は、アメリカの経済的覇権にとって大きな脅威であると見られていた。今の日本は、中国とインドとのアジアの覇権をめぐる競争で一杯である。今後の日本が二〇世紀型の軍事力モデルに依拠することはありえない。つまり、西洋の植民地帝国を模倣したり、過剰な資本主義と経済力によって国力の成長を誇示したりすることは、もうないだろう。

二世紀の日本が直面する可能性のあるシナリオは、次の三つである。(一) 孤立主義への引きこもり。グローバルな事柄にほんの少ししか関わらない内向きの国家モデル(江戸時代の「鎖国」モデルの再来)。(二) 極右ナショナリズムへの引きこもり。一九三〇代と四〇年代のときのように、狭く構築された純日本的アイデンティティを守るために軍事面と技術面での優秀さを見せつける。(三) グローバルな共同体への関与。日本文化をグローバルな文化へと統合させる——現代のポピュラー文化と伝統文化の双方において。

私はこの第三の選択肢を「ハイブリッドな日本」〔訳注〕ハイブリッドとは雑種、異種混合などの意味〕と呼ぶ。

「日本」民族と「日本」文化の「純潔性」を守ろうとする保守主義から離れ、日本社会が歴史の最初期よりハイブリッドであったことを認めるよう呼びかける。グローバルな相互依存性を見ても明らかのように、アイデンティティというものは、つねに流動的であって、「他者」によって構成されているのだ。

本論考では、この「ハイブリッドな日本」が、宗教の面で今後のグローバルな時代においてどのような展開を見せるのかを考えたい。まず、国民的アイデンティティと宗教的アイデンティティを、ハイブリッドという視点からとらえ返す。その際、とくに日米での局面に注意したい。グローバル化の時代においては、日本は孤立した島国とは見なされない。むしろ、島国だからこそ、環太平洋に位置するアジアとアメリカの両方につながっていると考えるのである。それは、アジアとアメリカの「仲介者」だということも意味する。そこで私は、(一) アメリカにおける日本の仏教、(二) 他アジアと比較した日本仏教の環境問題への関与を、日本宗教のグローバル化との関わり的事例として取り上げたい。

2 宗教的ハイブリッド性——日米の国民的アイデンティティと宗教的アイデンティティ

カリフォルニア大学バークレイ校で教えるようになって、私は「バークレイ」という名前の由来を知った。それは一八六八年にさかのぼる。大学評議員たちは新しい教育機関のための場所を探していた。もともとのカリフォルニア・カレッジは、会衆派の牧師であったヘンリー・デュラントによって一八五五年に創立されており、一八六八年に政府から土地の供与を受け、カリフォルニア最初の一般向け大学に統合された。統合の二年前、創立者の一人であるフレデリック・ピリングズは、キャンパスとそのまわりの街の名前として、一八世紀イギリスの有名な哲学者で主教であったジョージ・バークレイにちなんでバークレイとすることを提案した。ピリングズとその他の二人の管財人の頭のなかにあったのは、金門橋の外、そこから出港する船のことであろう。ピリングズは、バークレイ主教の「アメリカ」という名の詩の第五スタンザ(連)からの一節を念頭に置いていた。

「国の拡大と文明化は日の沈む道をたどる」というものである。別の言い方をすると、ヨーロッパを離れて西を目指す人々にとつて、文明化とキリスト教化はまったく同一の使命だったのである。

最初にアメリカに入ってきたヨーロッパの人々にとつて、アメリカは理想的な荒野だった。あるいは、住むべき楽園、征服すべき異教徒の地、新しいよりよきキリスト教国だった。この新しい文明を、大西洋を越え、アメリカ西部の「開拓地」へ、最終的にはさらに遠くハワイへ、フィリピンへ、そして他のアジアの太平洋の地域へと広めなければならぬ。そこには、「文明化」される必要のある「異邦人」がいる。これがアメリカの物語だった。アメリカという国は土着の民をキリスト教とヨーロッパ文化で「文明化」する国であるという概念は、「マニフェスト・デスティニー（自明の運命）」と呼ばれた。

二〇〇八年の現代では、状況がまったく変わっている。今日のバークレイ校は合衆国のなかでも東アジアと仏教の研究プログラムがもつとも充実している場所である。

宗教国アメリカの別の語り方として説得力がある。「アメリカはキリスト教国である」という物語よりも、「アメリカは自由の国である」という物語——信教の自由も含んだ——を、オバマは建国の父たちのヴィジョンとして持ち出す。建国の父たちは、何よりも国家の庇護を受けた宗教から逃れてきたのであり、宗教の自由（無宗教の自由も含む）こそがアメリカをアメリカたらしめているのである。

かつて憲法の教授であったバラク・オバマは、合衆国憲法の「政教分離」の条項を特別視し、宗教を信じたり実践したりする（あるいはしない）自由が、アメリカの開放性と白山の核心に当たると考えている。「私たちは仏教国でもある」というオバマの言葉は、ハワイに住むプナホー高校に通っていたという経歴から来ているのだろう。そこでは、アジア系や仏教徒の友人と出会うことは珍しくない。明治元年である一八六八年にハワイに定住した日本からアメリカへの最初の移民たち（「元年者」と呼ばれる）のことを念頭に置くと、ハワイ島では、一九二〇年代までは、キリスト教徒よりも仏教徒の方が多

環太平洋地域の重視は、研究面だけでなく、大学の成り立ちにも及んでいる。学部生の四〇%以上は、アジア出身ないしアジア系アメリカ人である。数年前のキャンパス内の調査によると、プロテスタントは二五%、カトリックは一四%、仏教徒はそれに次いで七%で、もつとも多いのは「無宗教」で四四%だった。

これは合衆国の西海岸ではそう珍しくない数字構成である。とくに、このような傾向は若い学生に顕著だろう。これは、アメリカが「キリスト教国」だというのは反対の物語である。事実、バラク・オバマ大統領も次のように述べている。「アメリカ人はほとんど多様化していますが、セクト主義の危険性は高まっています。私たちは、昔はキリスト教国だったかもしれないませんが、今ではそれだけではありません。私たちはユダヤ教国でもあり、イスラム教国でもあり、仏教国でもあり、ヒンドゥー教国でもあり、無宗教国でもあるのです」。

ジョージ・W・ブッシュと前政権の福音派との強い結びつきを考えると、現代アメリカにおける宗教パワーの重要性は否定できない。だが、オバマのヴィジョンは、

かったと考えられる。現代の話に戻ると、二〇〇六年の下院議員選挙ではメイジー・ヒロノ（日本名は広野慶子）代議士が最初の仏教徒の合衆国議員として選出されている。ちなみに同選挙では、ミネソタ州のキース・エリソン代議士が、イスラム系アメリカ人としては初の議員となっている。

アメリカと同様のことが日本についても言える。日本の歴史を見ると、時おり日本人の宗教性や民族性などという言い方で本質や純粋性への回帰が叫ばれる。だが、それは長続きしない。というのも、日本宗教の特質は純粋性よりもハイブリッド性にあるからだ。日本の民族、文化、宗教の風景を見渡すと、実際にはどこにも「本質」などない。仏教的な観点から言うと、アイデンティティは、自己の場合でも国民の場合でも、無常であり、空であり、無自性であり、依他起性である。日本という国は、「無日本」から離れて、本質的で恒常的で不變的で「純粋」なアイデンティティを持つことなどない。事実、江戸時代の国学者や明治時代の国家神道家の本質主義的な主張とは異なり、日本宗教は最初期からさまざま